年賀会と父の背中

サニーサイドアップグループ社長　次原悦子
つぎはら　えつこ

年末が近づき、去年コロナ禍で中止された経済界の納会、年賀会の案内状が届き始めた。この季節が来る度に、20歳で初めて出席した、経済界の年賀会の事を思い出す。

私の父は広告代理店の役員だった。17歳で仕事を始めた私を、父は快く思ってはいなかった。父の意見は当たり前だ。仕事より大学に通え。同じ業界で働くことも父は反対だった。

昔からの父の口癖を今でもよく覚えている。「親には頼るな。男にも頼るな。自立した女になれ」。あの頃、広告業界には知り合いなどいなかった。参加費の1万円はとても高かったが、少しでも仕事に結び付けられたらと、名刺1箱持って参加した。帝国ホテルの会場はすごく広くて、知らない人ばかりで、居場所なんてあるはずもなかった。

そんな時、賑やかな人垣のど真ん中に、父の姿を見つけた。嬉しかった。きっと父は私にいろいろな人を紹介してくれるに違いない。父に近づき「お父さん」と声を掛けたら無視された。聞こえないのかと思い、もう一度声を掛けたが見事に無視され、すれ違いざまに一言「親には頼るな」と冷たく言われた。すぐさま化粧室に駆け込んだ。父の言葉が耳から離れなくて、涙がボロボロ出てきて悔しくてたまらなくて、トイレにこもってひとしきり泣いた。

そして私は思った。絶対にいつか父を見返してやる。化粧室の鏡の前で化粧を直しながら、そのために今日やるべきことを決めた。この名刺を配り終わるまで絶対にこの会場を出ない、参加費の元を取って帰る。

それから会場に戻り、片っ端から声を掛けて名刺交換をした。ハイテンションな若い子から名刺交換をせまられたら、大抵は対応してくれるものだ。さっきまでトイレで大泣きしていたなんて誰も想像がつかないだろう。名刺は全て配り終わった。そして、お開きになるまで一人で食べて飲んで、少しだけ酔っぱらった。

70歳で父は他界した。「子どもには頼らない」が年を取ってからの父の口癖だった。

その口癖通り、何一つ頼られることなく父は急逝した。

あれから何十年もたった。毎年訪れる年賀会の会場はどこに行っても知っている顔ばかりだ。会場は随分小さくなった気がする。

２００８年、会社は上場会社の仲間入りをした。上場会社で創業女性社長というのは稀有な存在ということで、いろいろお声を掛けて下さる機会も増えた。来年は国際ＰＲ協会の会長に就任させていただく。

私は父の望む娘になれたのだろうか。年末が近づき、また新しい年が始まる。